

2019-20 年度 第 5 回 IUC 勉強会報告

2020.1.27

日時：2020 年 1 月 27 日（金）15:30-16:30

テーマ：Kanji in Context と WebKIC

担当者：秋澤委太郎

参加者：教員 8 名（専任 8、非常勤 0）

【概要】

担当者からの報告：

- WebKIC の機能と開発の経緯の説明
- 学生の WebKIC 利用状況から見た Kanji in Context の特徴
「スター」データの分析と「文字音声単語親密度」から
- Kanji in Context と WebKIC の改善の余地

参加者からの意見：

- 「スター」がつけられた単語は本当に「難しい」といえるのか
- 学習者にとっての単語の難度を調べるなら、テストが必要

【今後に向けて】

- WebKIC の学習履歴データの収集方法は改善が必要
- KIC の中盤の「難しさ」はどこにあるか、さらなる調査が必要

【引用文献】

秋澤委太郎 (2019) 「WebKIC の利用者データによる Kanji in Context 語彙の検討—学習者の感じた習得難易度と、単語親密度を中心に—」日本研究センター教育研究年報 第 8 号

天野成昭・近藤公久編著、NTT コミュニケーション科学基礎研究所監修 (1999) 『日本語の語彙特性第 1 巻単語親密度』三省堂

以上

2019-20 年度 第 4 回 IUC 勉強会報告

2019.12.17

日時：2019 年 12 月 6 日（金）15:30-16:30

テーマ：発表評価を考える

担当者：佐藤有理

参加者：教員 7 名（専任 7）

構成：学期末に実施している発表会の評価を検討

今なぜ評価が求められているかを、高等教育を取り巻く環境に触れ、当センターではど

のような評価が望ましいかについて、叩き台となる原案をもとに具体的使用法も交えて検討した。検討された主な点は、以下である。

- ・外部に教育成果を見せるための評価なのか、学生自身に指針を与えるための評価なのか。
- ・発表のゴールは何か。日本語の上達のためなのか、将来のスキルのためなのか。
- ・数値化が必要かどうか。
- ・評価項目については、ヴィジュアルエイドに関する出典の明記の有無や聴衆への「意識」があるか等の項目について。

検討の結果、センターの場合、どの時点での原稿を評価の対象にするかが難しい点を考慮し、当日のパフォーマンスだけを今学期末のミニ発表会では評価することとした。

【今後に向けて】既存のライティング評価の項目を参考にし、評価項目を検討し直す。最終的には外部の評価との対応表が求められることになるであろうが、まずはセンターの評価表を作ることが先決であるためその検討をしていきたい。

以上

2019-20 年度 第 3 回 IUC 勉強会報告

2019.11.29

日時：2019 年 11 月 29 日（金）15:30-16:30
テーマ：自己相違に関するアンケート項目の検討
担当者：白石恵利奈
参加者：教員 11 名（専任 9、非常勤 2）
構成：自己相違に関する先行研究の紹介
 今回のアンケートの目的
 藤村（2018）のアンケートの紹介
 アンケート項目の検討

IUC の学生から「日本語で話しているとき自分の性格がないように感じる」、「日本語で話しているときの自分は本当の自分ではない」といった声を聞いた。

先行研究では、母語で話す自分と学習言語で話す自分で思考や言動、表現方法、価値観などが変わることが明らかにされている。このように母語で話す自分と学習言語で話す自分の違いを「自己相違」と言う。

IUC の学生たちも少なからず自己相違を感じているようだ。そこで、IUC の学生を対象に自己相違に関するアンケート調査を行うことにした。

アンケート調査の項目は基本的に藤村（2018）を使用する。しかし、今回のアンケート調査では 2 点変更点を加える。勉強会ではその変更点を加えた際、アンケート項目が妥当であるか、また藤村（2018）のアンケート項目のほかに追加すべき項目があるかを検討した。

変更点はいずれもアンケートに答える際に想定する会話の場面についてである。藤村（2018）では、アンケートの回答者（日本語学習者）が母語で会話する場面と日本人と日本語で会話する場面を想定して答えるようになっている。しかし、今回のアンケート調査では日本人との会話ではなく、IUC の学生同士の会話を想定して答えてもらうよう変更する。それに伴い、母語で会話する場面を IUC の学生の共通言語である英語に変更する。こ

のように変更したのは、IUC の学生たちにとって日本人と会話するよりも学生同士で日本語を使って会話をする方がより身近であると考えたからだ。また、同じ相手と英語で会話するときと日本語で会話するときで自己相違を感じる方がよりストレスを感じやすいのではないかと考えた。

変更点については様々な意見が出た。例えば、母語での会話を英語に変更したが、やはり母語の方が良いのではないかという意見があった。英語にした場合、母語が英語の学生とそうでない学生で差が出る懸念がある。

追加項目についても様々な意見が出た。自己相違を感じるか否かは本人のプライドにも関わっており、最終学歴や職歴等のバックグラウンドを聞くことも有効ではないかという意見もあった。また、英語で話す自分の特徴と日本語で話す自分の特徴について答える項目では、「理想の自分」と「実際の自分」の両方を聞いてみたらどうかという意見も出た。

【今後に向けて】

上記のようにアンケート項目を検討する中で多種多様な意見を聞くことができた。これらの意見を踏まえてアンケート項目を再考する必要がある。また、アンケートの結果次第ではあるが、必要があればフォローアップインタビューや実際の学生たちの会話を分析できればより意義のある調査になるのではないかと考えている。

【参考文献】

- 小塩真司 (2014) 『Progress & Application パーソナリティ心理学』サイエンス社
スティーブ・マッカーティ (1999) 「2 言語・2 文化併用の意義—成人バイリンガルの自己観察」山本雅代 (編) 『バイリンガルの世界』 pp.133-159.
東本裕子 「使用言語による思考・表現方法の変容に関する一考察」 『比較文化研究 118』 pp. 139-154.
東本裕子 (2016) 「使用言語が話し手に及ぼす影響—日本語以外を母語とする複数言語話者への聞き取り調査から—」 『横浜商科大学紀要 11』 pp.117-134.
藤村寛子 (2018) 「日本語学習者における母語使用時の自己相違に関する一考察」 一橋大学審査修士学論文

以上

2019-20 年度 第 2 回 IUC 勉強会報告

2019.10.24

日時：2019 年 10 月 18 日 (金) 15:30-16:50

テーマ：上級日本語教育機関における専門別日本語教育を考える —専門科目を中心に—

担当者：結城佐織

参加者：教員 10 名 (専任 8、非常勤 2)

構成：CLIL (内容言語統合型学習) と「日本語を学ぶ、日本語で学ぶ」のポイントセンターにおける専門別日本語教育 (選択 A) の教育方法の情報共有
議題提起と意見交換

近年日本語教育では、CLIL（内容言語統合型学習）や「日本語を学ぶ、日本語で学ぶ」という方向で教育を行う機関が増えている。センターでは、後期に選択 A（専門科目）が設置されており、内容重視の日本語教育が行われてきた。センターとして各専門科目でどのような教育を行うべきか、何を目標にすべきかなどについて意見交換を行った。

まず CLIL の 10 原則において特に意見が多かったのは「内容学習と語学学習の比重は 1 : 1 である」についてである。上級日本語教育では、内容を中心に行うのは当然であり、内容学習と言語学習を明確に区別できるのかという点であった。センターで言う内容重視とは「焦点を内容（情報）理解・獲得におき、意味のある文脈の中での言語習得の促進」（岡崎 1994）であり、言語学習のために専門的な教材を用いているとの立場を取る。例えば法律クラスでは、条令や判例などを読ませ、長い名詞修飾を読み解く力をつけるなどである。センターでは専門科目において、今後も内容重視のアプローチを中心に進めていくことが確認された。

日本学概論クラスからは、教科の性質上、センターの選択 A の教育目標はあいまいであり、統一見解が欲しいとの意見が出た。センターの現カリキュラムは、総合運用Ⅲ→専門科目→プロジェクトワークというように段階的に組み立てられており、選択 A を独立したのではなく、カリキュラムでの位置付けから判断し、必要な技術を特化させているというクラスもあった。専門科目では 4 技能のうち読解力と口頭能力に力を注ぐクラスが多く、文学クラス以外は作文の課題は出さないなど文章力はほぼ問わないという傾向が見られた。

最後にセンターの教育目標は「独立して専門研究を行い得る日本語力を身に付けさせる」、いわゆる専門への橋渡しの日本語教育であることが再確認された。

【今後に向けて】

勉強会では時間の都合上話し合えなかったが、専門的な生教材を使用する際の日本語教育としての試みについていくつか触れたい。

歴史クラスでは 2 学期のお試しクラスの際、2-3 学期の IJ のクラスで扱う文型を生教材から取り出し、学生に日本語文法とカリキュラムの相関性を意識させている。文化人類学では写真報告でメディアを使用させ、文化人類学的な視点とプレゼンテーション能力を高めている。政治・経済クラスでは学期末の最終試験に課題図書による口答試験を行い、口頭能力を図っている。

このように各専門クラスでは、言語教育と専門教育のバランスを図ってはいる。今後の課題として、センターのカリキュラムとしての共通教育項目を考えて行くべきであろう。

【引用文献】

- 青木惣一・大竹弘子・大橋真貴子・串田紀代美・佐藤有理・佐藤つかさ（2007）「日本研究センターにおける専門分野別日本語教育－日本関係の専門分野を有する大学院生・専門家に対する専門分野別内容重視アプローチの実践報告－」『日本研究センター紀要』30号
- 青木惣一（2016）「アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの上級日本語教育」、『言葉と文学』、pp.126-133
- 池田真（2011）「CLIL（Content and Language Integrated Learning）の方法論」
- 和泉伸一・池田真・渡部良典（2012）『CLIL(内容言語統合型学習)上智大学外国語教育の新たな挑戦第2巻実践と応用』、ぎょうせい
- 岡崎眸（1994）「内容重視の日本語教育－大学の場合－」『東京外国語大学論集』49号、pp.227-224
- 奥野由紀子（編集）・小林明子・佐藤礼子・元田静・渡部倫子（2018）「日本語教師のた

- めの CLIL (内容言語統合型学習) 入門 (CLIL 日本語教育) 凡人社
佐藤つかさ (2017) 「日本語教師による歴史クラスの試み」 第九回「東西文化の融合」国際
シンポジウム
西口光一 (1990) 「上級日本語教育のプログラム：アメリカ・カナダ大学連合日本研究セ
ンターの場合」 『日本語教育』 71 号、pp.69-84
森岡明美 (2016) 「CBI (CCBI), CLIL, EMI, IB の大学教育への貢献」 英語教育と日本語教
育に於ける CBI の将来展望—イマージョン教育、IB 教育、CLIL、EMI の観点か
ら—、早稲田大学ミニシンポジウム
結城佐織、松本隆、橋本佳子、大沢えり (2018) 「選択 A 『日本学概論』 2017-18 年度実
践報告」 『日本研究センター教育研究年報』 第 7 号、pp.123-137
結城佐織 (2019) 「2018-19 年度カリキュラム検討委員会報告」 『日本研究センター教育研
究年報』 第 8 号、pp.190-209

「言語教育プログラム可視化テンプレート_Ver2.22_教師版」

http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/project/Pro_Ken/contents.html
<2019.10.14 閲覧>

以上